木と共に生きて

細田安治

■■12■■

イミテーションとの闘い

全ツキ連・東京ツキ商結成

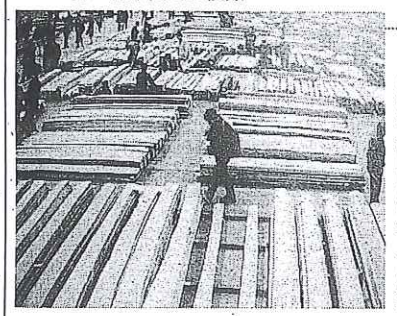
49年前の1962年（昭和37年）9月、東京ツキ板商工業会発足の日に会長に選出された北三創業者の尾山金松氏は、「世はまさにイミテーション時代。技術が向上し優秀なものができればできるほど、世の中から天然木の良さが認められていく」と挨拶され、業界を激励と同時に団結を呼びかけた。ツキ板商工業会は次々と行動を起こした。

当時の通産省に陳情し、ツキ板は「天然木」、イミテーションについてはチーク「柄」とはっきり表示を改めさせ差別化した。各地の家具展示会でツキ板製の家具に対しては全ツキ連から天然木ツキ板賞を授与した。

67年（昭和42年）には関係者の協力をいただき、日本木製品技術協会の編集でツキ板ハンドブックを作成し全国の職業訓練所、学校などに配布、ツキ板の啓蒙普及に努めた。

70年（昭和45年）には全ツキ連主催の全国ツキ板展示大会を東京・晴海で開いた。審査表彰の基準を定め、優良ツキ板、優秀な加工製品には、加工技術賞を授与し生産者を表彰するなど生産意欲の向上に努めた。

私は審査委員長に就任し、ツキ板の審査規定を作った。加工技術は林大九郎先生にお願いした。その後、72年（昭和47年）にはPR委員長に就任し、ツキ板のPR映画「樹の創造」（35ミリ・25分）を製作して関係官庁、学校、関係団体、構成員に配布した。



㊤　全国ツキ板展示会入札風景（中央右から2人目が筆者）
㊦　展示会での検品

全天連結成と構造改善

その年に全天連が結成され、初代会長に岐阜の五島昇氏が就任した。公に認められた全国団体として構造改善事業に取り組み、事業所税の免税等、構成員の経済的な地位の向上に努めた。

全天連は、来年の2012年（平成24年）には創立40周年となる。先達の築いた功績により今があるわけで、先達の努力、功績に深甚なる敬意を表する次第だ。

創業当時、尾山会長が言われたお言葉の通り、ツキ板はイミテーションとの競争に勝ち今日までの繁栄があり40年間の発展があったわけである。このように、半世紀前に訪れた危機は、構成員の努力により乗り越えることができた。

平成の危機

時代が下がり、平成時代の今はと見ると状況は全く同じではないか。全天連の竹内会長は常にご挨拶で、業界は不景気とイミテーションによる攻勢の二重苦で低迷を強いられている。

ここで印刷物との競争に勝つには、「天然の持つ自然の風味、一つひとつ違う木の持っている風合い」などがツキ板の特徴だ。今やツキ板は印刷イミテーションができないもの、自然の風合い特徴を生かした新しい使い方を開発し、「真似のできない品質で勝負すべき」と力説されている。

半世紀前、我々の先達が危機感から業界で結束し印刷との競争に勝ち今日を迎えた。正に先達の言葉の通りになったのである。

今こそ団結

全天連は、業界を代表する唯一の全国団体だ。先ごろ、全天連が不当表示を問題視して大手塩ビメーカーに抗議、数年がかりで訂正させた実績がある。これは大変な快挙だった。

事は、大手メーカーと中小零細の業者だ。個別の一社や二社では相手にしてくれぬが、小なりとはいえ全国業者が集まる唯一の団体だ。全国団体との交渉結果が詫び状を添えた訂正文で解決した。

こんな快挙はない。全天連だからこそだ。この点の認識を新たにしなければと思う。全天連が窓口でなければ門前払いで、泣き寝入りするしかないのではなかったか。民間相手でも大勢の力はこんなに強いことを認識願いたい。更に行政と業界が話しができる唯一の窓口が全天連だ。

行政は業界を指導する立場にあり、業界からの働きかけを望んでいる。ここで、全国団体でなければできないことを行政に働きかけるべきだ。一社ではできないこと、団結しているからこそできること、国の行政が相手にしてくれるのは全国団体のみだ。

幸い全天連は、強力な事務局と強いリーダーシップを持つ竹内会長、役員は全国代表の有力な方ばかりだ。全国団体としての認識と自覚、そして団結と一致協力ともう一つは事務局の強化充実だ。

全天連の強化と強力なる活動で現在の苦境打破し、イミテーションとの競争に打ち勝たねばならない。特徴を生かし自信を持って業界団結し、危機を突破すべきではないか、賢者そろいの全天連が、叡智を結集しともに手を携えて頑張れば、必ずこの苦境は突破できると確信している。

再度推されて東京ツキ板商工業会会長

92年（平成4年）、東京ツキ板商工業会の会長に推された。

常々、デザイナーの先生から「木材を生かす使い方は、欲張らず他の資材、例えば壁紙、石、ガラス、金属と複合させて使い、その中で木材の良さが際立つような使い方をすることです。木が主体か、スパイスかはその場の条件によって違う。木材屋だからと言ってやたら少ない貴重な天然木を多く使えばよいものではない。ここを間違えずに」と言われたことを思い出した。

なるほど、ツキ板の使用量が少ないのは残念ではなく、この場にあった全体の雰囲気を盛り上げているかいないかだと気づくことができた。何でもかんでも木だけ使わせるというのではなく、全体の調和、美しさを醸し出すために必要な材料の一つが木であるのだ。

幕張メッセでツキ板シンポ

99年（平成11年）千葉の幕張メッセの大会場を借り切り第2回ツキ板シンポジウムを開いた。第21回全国ツキ板展示大会と同時開催となった。

講師は最高の講師を選んだ。木材については№1の千葉工大の小原二郎教授、インテリアデザイナーの中でも木材について造詣の深い山本棟子先生、木材の内装にかけては業界トップ企業の内外木材工業事務の武南勝美氏の御三方。これ以上の講師はいないと言うメンバーで臨んだ。

ツキ板PR映画「樹の創造」を上映、林野庁の半額補助事業としてのシンポジウムだ。業界一丸。当時の東京ツキ板商工業会の会員は53社であり全員がそれぞれの立場でご協力とお手伝い願ったことで、会場は満員となるなど大成功となった。

会員各位と関係者の皆様に、紙上より当時のご協力に改めて心からなる敬意と感謝を申し上げます。講師の先生方も御満足の様子であった。これでツキ板に対する世間の更なる理解と評価が高まった。

集団の力。一人ではできないこと。小なりとはいえ団結すれば〝巨象も倒す〟の例えのとおり、大勢の力の活用が大事だ。現在は全天連を中心に活動している。会員各位には他人事でなく自分ごととして、紙面からではございますが更なるご協力をお願い申し上げます。

2006年（平成18年）、東京ツキ板商工業会は財政難のため、残念ながら活動を停止した。1962年（昭和37年）発足以来、足掛け45年間、半世紀にわたり先輩が築いたものを無にすることは誠に忍びないが、本体の精神は発展的に関東天然木化粧合板協同組合にホームページとともに移行した。そして全国団体の全国天然木化粧合単板工業協同組合がそのまま継承している。　〃次回は12日付＝

（細田木材工業㈱会長）